

た我が學界に竭した功績を述べて、諸君と共に彼を追想致しますことは、惜しき彼の永眠に對する私のせめてもの心やりであります。

長らく清聽を煩はしたことを感謝致します。

(東洋史研究第十卷第三號、昭和二十二年十月十九日、東方學術協會主催第一回公開講演内容)

最近露都通信

其一 (八月三日發)

謹啓益々御清勝奉慶賀候、八月三日といへば京はやける程の暑さに團扇の御手御忙はしき頃とはるかに奉拜察候。當地此頃の氣候は京の中秋にも當り可申や、それも日中熾烈などは影をひそめて終日ドンヨリとした空模様候へば、浮き立たぬこと夥しく、いつ迄も暮れ果てぬ街路の光線を二重の硝子越しに眺めては浴衣の袖輕き京の夕暮を忍び居り候。

來着以來早くも十月を經過致し申候。出發の當時より心配致し居り候ラドルフ先生は病狀其後追々輕快に趣かれ只今にては心配する程のことも無之よしに候へども、こゝよりは隔てる田舎に靜養せられ(中略)プリヴァトドチエントなるサモイロキッチ氏はフィンランドの奥に引込みて勉學中のよしに有之、イヴノフ氏も巴里旅行中の由に